

## 標識調査の現状とこれからについて

出口智広<sup>1</sup>・森本元<sup>2</sup>・三上修<sup>3</sup>

<sup>1</sup>山階鳥類研究所・保全, <sup>2</sup>立教大・理/山階鳥研/東邦大・東京湾セ, <sup>3</sup>岩手医大・共通教育

日本における標識調査は 1924 年に農商務省によって開始された。第二次世界大戦にともない、この調査は一時中断されたが、1961 年から林野庁、米軍移動動物病理学調査所の支援により再開され、1972 年以降は環境庁(省)の委託事業として現在まで実施されている。山階鳥類研究所は、1961 年以降の標識調査の実施主体であり、これまでに集められた標識個体情報計 500 万件以上を一元的に管理している。

開始当初の標識調査は、再捕獲による標識個体の移動分散の解明を主な目的としていた。そのため、国内各地や近隣諸国での調査および協力調査員の養成が積極的に行われ、近年は調査員約 450 名が年間 15 万羽を国内で標識放鳥する調査体制となった。また、調査規模の拡大にともなって目的も多様化し、形態、分類、生理学的情報も収集されるようになり、最近では局所スケールだけでなく全国スケールにおける鳥類の個体数や渡り時期の変化などが報告されるようになった。

このように日本の標識調査は大きな発展を遂げてきた。しかしながら、現在は調査員の高齢化、新規参加者の減少、調査場所・時期の偏りなどの問題を抱え、その発展も伸び悩みつつある。本自由集会では、標識調査に関わる講演者に、その魅力や問題点について話題を提供していただき、今後の発展につなげる場としたい。

### プログラム

1. 趣旨説明: 出口智広(山階鳥研・保全)
2. 標識調査の意義・歴史・体制について(30分): 茂田良光・吉安京子(山階鳥研・保全)
3. 調査実施状況について(30分): 山根みどり・澤祐介(日本鳥類標識協会)
4. 情報のアウトプットについて(30分): 森本元(立教大・理/山階鳥研/東邦大・東京湾セ)、三上修(岩手医大・共通教育)
5. 意見交換  
総括: 尾崎清明(山階鳥研・保全)